

19世紀中葉アメリカ文学におけるセレブ作家の登場

——ルイザ・メイ・オルコットを中心に——

本 岡 亜 沙 子*

はじめに

ヨーロッパ旅行中の1867年、ルイザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott, 1832-88) は、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の講演に足を運んだ。「わたしのアイドル」(Alcott, "Charles Dickens" 3) によろしく会えると喜びをかみしめていた彼女は、舞台上に現れた本人を一目見て驚愕する。彼女はなにも当時55歳のディケンズに「ハンサムで、おしゃれな青年」(3) 像を期待していたわけではない。しかし、オルコットは彼がまさか、赤ら顔で歯は入れ歯、声は疲れ切った俳優さながら、残り少ない白髪を無理に巻いたキザな出で立ちで登壇するとは思ってもいなかったのだ。しかも、ディケンズのイギリスなまりが耳に障り、話の内容にまったく集中できなかったと、オルコットは不満を漏らす。ところが、観客の体調不良に気づいた彼が壇上から降り、父親のようにその人物の手当てを始めたことで、オルコットはディケンズへの評価を改める。アイドル=崇拜の対象であったディケンズの誠実な人柄に触れることで、オルコットは登壇者にはもちろん演説内容にも「あたたかみ (at home)」(3) を感じたというわけだ。「わたしのアイドル」とまでディケンズに心酔していたオルコットが、彼の人間味に触れ、さらに強烈な親近感を覚えたこの一連の出来事は、果たして何を意味するのか。

『作家にお近づきになること』(*Getting at the Author*) の著者バーバラ・ホックマン (Barbara Hochman) によれば、アメリカにリアリズム小説が隆盛する19世紀末まで、作家は孤高の芸術家というより、読者と距離の近い、友人のような存在であった。その変化は、語りに〈私〉の視点が入っているかどうかにかんづいてもたらされた。すなわち、リアリズム小説以前の作品では、登場人物同士の心境や助言が一人称で語られていたため、読者はその言葉をまるで自分へのメッセージのように受け止めていた。しかし、ノンフィクションや新聞・雑誌記事など、真実が書かれているものの一環としてリアリズム小説やルポルタージュ的小説が登場することで、語りは主観的な一人称から客観的な三人称に変化する。必然的に読者は、物語に入り込む隙間を見失い、小説や作家に距離感を抱き始める(1-4)。とすれば、オルコットがディケンズに感じたアットホームな雰囲気や、「私のアイドル」という、私的所有物としての作家観は、リアリズム小説が隆盛する以前の作家観や作品観と一致していたのではないか。

作家と読者の間に存在した親和関係に加え、19世紀半ばのアメリカ文学界におけるもう一つの特徴は、文学的セレブリティの登場にある。文学作品にはなく、その作品を手掛けた作家に注目が集まり始め、ブランドと化していったわけだ。その風潮ゆえ彼らは、現代というブログや twitter などのソーシャルメディアを介したファンとの交流など、執筆業以外の自己宣伝活動やファンサービスに明け暮れる。ディケン

* 広島経済大学経済学部准教授

ズやオルコットも例外ではない。

ディケンズに影響を受け、彼の作品を自身の文学修行に生かし、出世作『若草物語』(*Little Women, or, Meg, Jo, Beth, and Amy*, 1868)でプロ作家へ成長を遂げたオルコットは、先述のホックマンに言わせるならば、アメリカにおけるセレブ作家の先駆けであった(23)。ともにセレブ作家であるディケンズとオルコットについては、双方の作品における登場人物のインターテクスチュアリティが論じられやすい(Susina 164-65)。しかし、オルコットにおけるディケンズ作品の受容体験を体系的且つクロノジカルに詳述する先行研究はなかった。習作期のオルコットがディケンズ作品をどのような手段や方法で自身の創作活動に生かしていたかについては別の稿にゆずるとして、本稿ではその予備的考察として、彼女のディケンズ作品の受容体験を、日記や手紙などの一次資料をおもに用いながら詳述していく。さらに、作者/読者の友情関係に生産者/消費者という商売がらみの関係が介在してくるターニングポイントとして、19世紀半ばのアメリカ文学界におけるセレブリティーの出現を捉えることで、芸術の市場化問題に対する同時代作家の立ち位置や葛藤についても考察していきたい。

1. アメリカにおけるセレブ作家の登場

アメリカが市場社会に転換した19世紀中葉、出版は一大産業となる。大量印刷を可能にしたシリンダー印刷機の開発などによる印刷技術の進歩、鉄道網の発達、人口の増加、教育の機会と識字率の高まりによって、未曾有の読者層が出現したからだ。国際著作権法が制定されておらず、利益分配の義務が無い外国書の復刻本に向かいがちだった出版業者は、アメリカ人の書いた本で利益を上げることを期待し始めた(Gilmore 3-4)。

アメリカ文学の幕開けは、1837年、ロマン

派作家ラルフ・ウォルド・エマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-82)が発した「アメリカの知的独立宣言(Intellectual Declaration of Independence)」にさかのぼる。ヨーロッパを離れ、アメリカ人独自の様式で執筆すべきことを力説したこの宣言文どおり、エマソンらロマン派男性作家は、その頃から1850年代にかけて、のちにアメリカ古典作品と称される作品を次々に発表する。しかし皮肉にも50年代の市場を独占したのは彼らの作品ではなく、女性作家の書く感傷小説(sentimental novel)や家庭小説(domestic novel)であった。ロマン派作家のなかでは市場受けのよかった作家ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne, 1804-64)でさえ当時のベストセラーとされる6,000部を突破するのに数年かかったというのに、女性作家スーザン・B・ウォーナー(Susan B. Warner, 1819-85)は第一作『広い、広い世界』(*The Wide, Wide World*, 1850)を、販売から一年足らずで4万部以上売ってしまう。売れ行き好調な後者の本は、1852年までに14版に達し、最終的に100万人を超す読者をつかんだ。また、マリア・カミンズ(Maria Cummins, 1827-66)の『点灯夫』(*The Lamplighter*, 1854)は出版から2ヶ月で4万部売れ、ハリエット・ビーチャー・ストウ(Harriet Beecher Stowe, 1811-96)の『アンクル・トムの小屋』(*Uncle Tom's Cabin*, 1852)はわずか5ヶ月で10万部を売る(Rose 86)。ウォーナーの人気に肩を並べる女性作家が目白押しだった当時の文学界はまさに「女性の50年代(the feminine fifties)」(Baym 20)だったのである。

感傷小説や家庭小説に涙する女性読者の急増に加え、読者層の裾野をさらに広げたのが印刷技術の革新であった。ハードカバー本の価格が通常1ドルから1ドル50セントであった1860年代に、「1ドル分の内容を1ダイムで提供する」(山口 19)と宣伝文句を謳いあげた「ダイムノ

ヴェル (dime novel)」が飛ぶように売れる。文字通り、1ダ임 (10セント) という破格値で売られた、この廉価版小型ペーパーバックの登場により、読書は誰でも、いつでも、どこでもできる気軽な娯楽に変わる。事実、ダ임ノヴェルは時の大統領から新聞配達少年まで幅広い人々のポケットに収められ、移動時間や仕事の合間に読まれたのである (21-22)。

こうして読者層に厚みが増すにつれ、出版物は金儲けの道具と化す。出版者は職人気質の印刷技術屋ではなく、市場調査から販売戦略の立案、宣伝、販売、さらには新人発掘まで請け負うプロデューサーとなる。出版物を宣伝販売する上で、彼らがとりわけ重視したのが広告であった。広告、延いては商業・消費主義と文学の相克について論じた『広告する小説』 (*Advertising Fictions: Literature, Advertisement, and Social Reading*) の著者ジェニファー・A・ウィキー (Jennifer A. Wicke) は、広告の変遷を追いながら、「広告の時代」と称される19世紀中葉、小説が広告と渾然一体になったと論及する。ウィキーによれば、かつて写本の奥付の頁に記された、写本売買を禁じる但し書きに過ぎなかったものが、印刷された文学書の冒頭を飾る序文広告へと変わり、19世紀も半ばになると小説の中に広告が混ざり合う。小説を書く行為が広告を打つ行為と同義で、名前を売る行為にもなるからだ。しかも、小説に同社の豊富な商品ラインナップの広告記事が所狭しと並び、広告的な文句の入る実験的な小説も登場するとなれば、小説と広告の境界はますます判然としなくなる (3-5)。

広告の絶大な宣伝効果を狙う出版者は、出版物に付加価値をいかに付けるか知恵を絞る。結果として彼らは、作家のプライベート情報や肖像写真など、小説を読むだけでは知りえなかった未公開情報を読者に提示し、作家と読者の垣根を低めることに成功した。こうした出版物に

付加価値をつける出版社の販売戦略が、結果として19世紀アメリカにおける異様な作家崇拜—作家のブランド化—や追っかけファンの登場を生み出していく。

このような出版文化のなかで登場した時代の寵児—セレブ作家—の一人が、自己宣伝のパイオニアとでも言えそうなロマン派詩人ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) であった。無名時代から自身のビジュアルによほど自信のあった彼は、のちの代表作『草の葉』 (*Leaves of Grass*, 1855) の初版に作者名ではなく、自身の肖像写真を付けた¹⁾。策士ホイットマンはさらに、その詩集に求愛めいた詩を多数盛り込むことで、女性ファンを戦略的に獲得しようとした。そのシナリオは見事に的中する。幸か不幸か、プロポーズの手紙が相次ぎ辟易してしまうほど、この伊達男は人気を得たのである (Blake, "When Readers" 104-08)。さらに翌年出版された第2版に箔をつけたかったホイットマンは、エマソンからの手紙に書かれていた賛辞 "I greet you at the beginning of a great career" を背表紙に掲載した (Moran 23; Blake, *Walt* 85)。ホイットマンはいわゆる「ジャケ買い」を狙ったのである。こうしたホイットマンのイメージ戦略をめぐる一連の騒動は、現代日本で言うところの、とあるアイドルグループのファンが求める握手券のように、ファン心理をくすぶる情動的な付加価値が作品=商品に付与されていることを裏付けていよう。

ホイットマン以上にセルフ・ブランディングに尽力し、成功を収めた人物がマーク・トウェイン (Mark Twain) であった。本名サミュエル・クレメンズ (Samuel Clemens, 1835-1910) は、「マーク・トウェイン」というペンネームで人気を得てから、著作物だけでなく、マーク・トウェイン印のついた糊つきスクラップブックや印刷機、タバコなどのグッズ販売に手を出す。商才は無かったようだが、商品開発か

ら販売まで請け負うなかで、商標登録にヒントを得たトウェインは、ペンネーム「マーク・トウェイン」の商標権を取る。名前の独占権を主張するほど、この作家は名前が売れていたのである。

当然ながら、このような芸術の市場化を忌々しく思う作家もいた。芸術と大衆との間に積極的な関係を築きたくない（築けない）代表的人物が、自身の肖像写真の掲載を30年来拒み続けたハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819-91）と、前述のナサニエル・ホーソーンであった。前者は、「手間仕事で、金儲けのために」（Melville 138）書き上げた駄作を前に、商業的成功の望みが作家の芸術性や実力、心からではなく、懐具合から発せられる葛藤に頭を悩ませる。彼はその妥協について「世間の人々が糊口をしのぐため材木を挽くよう」（139）なものだと自己擁護しながらも、自己表現を抑制しなければならない状況に、やり場のない怒りと失望感をあらわにする。

メルヴィルと同じくホーソーンも芸術にすぎない文学市場をこき下ろした。「アメリカは、いまや、いまましい物書き女どもの大集団に、完全に制圧されてしまった。大衆が、あの女どもの手によるくだらない作品を喜んでる限り、私に成功の望みはないし、成功したら恥ずかしいと思うだろう。」（Baym 21; Matthiessen x-xi）と、彼は同時代の女性作家に怒りの矛先を向ける。ホーソーンは、お涙頂戴物語から得られるカタルシスなど、安価な興味と快楽を求める大衆に迎合することを拒む。とはいうもののやはり、孤高の芸術家像を貫きたい理想と、売文稼業に励まざるを得ない現実の間で、ホーソーンもメルヴィルも揺れ動いていたのである。

2. セレブ作家ディケンズに熱狂するアメリカ人

ホイットマンやトウェイン以上にアメリカで

強烈な支持を得ていたのが、海外セレブ作家であった。19世紀中葉まで、アメリカ独自の出版物よりヨーロッパ文学の方が2倍近く出版されていたこと（山口 33; Zboray 180）、そして国際著作権法が制定されていないアメリカで、廉価版や海賊版が出回っていたこともその人気の秘訣であった。数多のヨーロッパ作品のなかでもとりわけ一世を風靡したのが、イギリス人作家チャールズ・ディケンズの作品であった。

折り紙付きの流行作家ディケンズの手に入るため、アメリカの出版社はやっきになった。たとえば、彼の手書き原稿を独占入手するために前金を払う出版社や（McParland 57）、アメリカの港で手稿を受け取ったと同時に印刷所に駆け込み、徹夜で印刷させ、24時間以内に2万4千部発行する出版社、48時間以内に5万部売りさばく別の出版社もあった（68）。

空前絶後のディケンズブームは全米各地に広がる。その盛り上がりぶりは、1842年、アメリカを初訪問したディケンズを、「当地での歓迎ぶりをどう伝えて良いかわかりません。地球上いまだかつてこれほどまでに歓待され、舞踏会や晩餐会でもてなされた王や皇帝はいたでしょうか」（Dickens, *Letters* 43）と有頂天にさせる。豪華絢爛な催しに意気揚々としていたディケンズだが、“If I turn into the street, I am followed by a multitude. If I stay at home, the house becomes, with callers, like a fair. I am exhausted for want of air.”（87, 強調筆者）と、四六時中ファンに追われるあまり、彼は息も絶え絶え、疲弊してしまう。

では、ディケンズの度肝を抜かせたアメリカでのディケンズブームはいかにして起こったのか。それは、ファン層が厚く、商業主義に沸くアメリカ社会と作家の波長が合い、作品内容もアメリカの流行小説と傾向が似ていた、という3つの理由に因った。一つ目のファン層の厚さについては、ディケンズ作品を号外として大量

発行していた週刊紙『ニュー・ワールド』(*The New World*)の、1842年2月12日付の社説が参考になる。

Has Mr. Dickens yet to learn that the very absence of such a law as he advocates, he is mainly indebted for his widespread popularity in this country. To that class of his readers—the dwellers in log cabins, in our back settlements—whose good opinion he says is dearer to him than gold, his name would hardly have been known had an international copy-right law been in existence. (McParland 46, 強調著者)

この記事は、ディケンズ作品がエリート階級から一般庶民まで幅広い層から支持を得ていたことを提示する。本の値段が高く、ダイムノヴェルの登場まであと20年待たねばならない1842年、低所得層の人がディケンズ作品を愛読できたのは、当時のアメリカに海賊版や廉価版が普及していたからであった。第1回訪米記『アメリカ紀行』(*American Notes for General Circulation*, 1842)の売値がイギリス版の14分の一であったことは、その典型例であろう。収入減も甚だしい廉価版という元凶に対し、ツアー中、ディケンズは幾度となく苦言を呈し、国際著作権法の制定を要求している。しかし上記の社説通り、アメリカの出版社はもっぱら、彼の提案に対し、国際著作権(copyright)法ならぬ国際複写権利(copy-right)法の主張で切り返した。彼らは、国際著作権問題に触れたディケンズの言葉を懇懇に無視、もしくは強欲で恩知らずと非難し、再販や海賊版の横行するアメリカこそがむしろ、ディケンズ人気を支えていると自己正当化していたのだ。盗人猛々しいこの主張は同時代アメリカ人の出版倫理の欠如を浮き彫りにしてはいる。しかし同時に、こ

の社説は、ディケンズ作品の読者層の裾野が海賊版の普及によって広がった事実を詳らかにするものでもある。

ディケンズブームが起こった二つ目の理由は、彼が民主主義社会における立身出世の夢、アメリカンドリームの実現者と見なされていたことにある(もっともディケンズはイギリス人なのだが)。家柄も富も社会的地位も持たないディケンズが、自らの努力と才能だけで名声を得たという事実は、民主主義を標榜するアメリカ国民に気に入られる要因となり得た(McParland 35; 川澄 45)²⁾。

加えて、同時代作家アンソニー・トロロープ(Anthony Trollope, 1815–82)から“Mr. Popular Sentiment”(205)と言わしめたディケンズは、19世紀中葉のアメリカで流行していた感傷小説や家庭小説と相性が良かった。なかでも彼の代表作の一つ『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1840–41)に登場する、祖父を助ける純真無垢な孤児リトル・ネル(Little Nell)が早世する場面は、アメリカ人読者の涙腺をおおいにゆるませた。ここで補助線を引くと、この泣かせどころは商売気の強いアメリカにおいて金もうけの格好の素材となった。事実、リトル・ネルをアメリカ建国の父ジョージ・ワシントン(George Washington, 1732–99)や世界中で読まれるグリム童話のヒロイン眠れる森の美女(Sleeping Beauty)と横並びに展示する蠟人形館や、リトル・ネルが幸せに生き続ける劇が次々に登場し、来場者を号泣、もしくは歓喜の渦にまきこんだ(McParland 19)。

このようにディケンズ作品やキャラクターは、アメリカンポップカルチャーのアイコン的存在となった。その人気定着の決定打を放ったのが、彼が1867年12月から約5ヶ月間実施した公開朗読ツアーであった。アメリカに初訪問した1842年より四半世紀経ってもなお人気の衰えないディケンズは、東部を中心に18都市を巡業

した全76回の朗読会で純益2万ポンド（当時の6万ドル、現代の200万ドルに近い）、なんと遺産の約半分を稼ぎ出したと言う（Forster 446; Tomalin 366）³⁾。この絶大な商業的成功を陰で支えたのが、ツアーマネージャーのジョージ・ドルビー（George Dolby, 1831-1900）であった。ディケンズと知り合った時、失業中の元劇場支配人であったこのドルビーという男は、アメリカ史上最大の見せ物興行師 P・T・バーナム（P[hineas] T[aylor] Barnam, 1810-91）の助言を受けて本公演ツアーを成功に導き、のちにマーク・トウェインの公開朗読ツアーのマネージャーも担当した人物である。成り上がり男ドルビーは、公演者が渡米する前から「チャールズ・ディケンズ」のブランド力強化のため大々的な宣伝を打った。その宣伝効果はてきめんし、公演チケットは飛ぶように売れる。その様子は、チケット販売初日、1,000人の長蛇の列がチケット売り場にできていたという、ヘンリー・ジェイムズ（Henry James, 1843-1916）の目撃談から明らかとなろう（James and James 12）。ファンだけでなく、あざとい商売人もディケンズの公演チケットをやっきになって買い求めた。事実、ボストン公演4日分のチケットを発売前に買い占めようと裏取引するボストン大手出版社社長や、最前列の座席指定を執拗にせがむ身体障害者に扮した人物、プレミアチケットを売りさばくダフ屋などがチケット争奪戦を繰り広げていた。貧富の差無く先着順で公演を観られるよう、ディケンズ本人がわざわざ2ドルに設定したチケットは、結果的に数十倍の値段に跳ね上がった（Tomalin 366；梅宮 19）。

他方、公演者ディケンズ自身も商売に疎かったわけではない。彼は公演ツアーに合わせて、朗読予定の小説を寄せ集めた「特別版」を数種類用意していた。公演後、余韻に浸る観客に対し、彼はそのプレミア本を会場で販売した（Helms 144-45）。ディケンズの思惑は見事に

外れ、特別版の売れ行きは悪かった。観客たちは公演後に販売されることになる特別版の海賊版を愛読したからである。オリジナル版と海賊版をめぐる作者とフォロワーのいたちごっこはその後も続く。いずれにしても、海賊版のせいで収入が激減したと嘆いていたディケンズは、皮肉にも、その海賊版のおかげで公開朗読会に足を運ぶ観客動員数を増やし、莫大な収入を稼ぐことができたのだ。急がば回れ、ということか。

このようにディケンズは、19世紀中葉アメリカの出版ブーム—読者層の増加、感傷小説や大衆小説、広告の人気上昇—に乗り、定評を得た。その人気ぶりからして、ディケンズがアメリカ出版文化の隆盛に一役買った（McParland 1）ことは言うまでもなさそうだ。

3. ディケンズマニアのオルコット

オルコットは、近隣住民で父の友人であったエマソンの書斎で外国文学に触れた。本の価格が高く、女性が読書することに少なからぬ抵抗感を持たれていた1840年代より、シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）やダンテ（Dante Alighieri, 1265-1321）、ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1746-1832）、カーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）、ディケンズなど数々の本をエマソンはオルコットに紹介した。彼女は、自己信頼や人格、償いや愛、友情を教えてくれるエマソンを「わたしのゲーテ」（Alcott, *Journals* 234）と呼んだ⁴⁾。ある少女がゲーテと交わした往復書簡に憧れた当時15歳のオルコットは、彼女を真似して親愛なる「わたしのゲーテ」に手紙を書き送ったこともある⁵⁾。

では、教養を教えてくれる指導者的な存在であった「わたしのゲーテ」、延いてゲーテは、オルコットにとって文筆上のお手本になり得たのか。『若草物語』執筆から4年後、「何事も文

筆という網にかかる魚。ゲートは喜びや悲しみを詩に読み込んだ。私は自分の珍しい体験 (adventures) をパンとバターに変える。」(182)と、彼女がゲートと自身の執筆スタイルの違いに言及したことは注目に値する。オルコットは、ゲート(たち)の追究する芸術性ではなく、大衆性のある、利益追求型の作家になるよう志していたのだ。

筆で身を立てるため、オルコットは、エマソンおすすめの外国作品からディケンズ作品に目を付けた。第2章で言及した、同時代のディケンズブームに彼女も乗ろうとしたわけである。幼少期よりディケンズ作品を劇の脚本や家庭新聞にアレンジして遊んできた彼女にとって、ディケンズ作品を執筆のネタに、換骨奪胎することは難しいことではなかった。

まず演劇脚本へのアレンジについてだが、オルコットは女優志望の姉や芸術肌の妹、裁縫上手な母親と作った家庭劇団ルイ・オルコット一座 (Louie Alcott troupe) に、エマソン家の子ども (次女イーディス [Edith, 1841-1929] と次男エドワード [Edward, 1844-1930]) やコンコードの学校長フランクリン・ベンジャミン・サンボーン (Franklin Benjamin Sanborn, 1831-1917) などの新メンバーを招いたコンコード・ドラマティック・ユニオン (The Concord Dramatic Union) を結成していた (LaPlante 202)。そこでディケンズ好きな脚本家オルコットの采配が振るわれる。ルイ・オルコット一座は『ディケンズの風景』 (*Scenes from Dickens*) や「ジャーリー夫人の蠟人形」 (“Mrs. Jarley’s Waxworks”) など、ディケンズ作品をアレンジした演目を上演する (Stern 185, 191-95)。同時代のディケンズブームに乗ったオルコットたちの公演会場は、ディケンズ好きの集まるファン会場と化す。

明らかにファン受けのよい公演を続けていたにもかかわらず、それらの公演は「パンとバ

ター」代の稼ぎを第一義にしたものではなかった。というのも、オルコットたちは、公演の収益を、ディケンズ作品に登場するような恵まれない人々への支援や、町のインフラ整備用の寄付金に充てていたからだ。たとえば同劇団員は、1865年1月、成人向け市民教養講演を行う機関「ライシーアム」の建設費を集めるため、タウンホールで開催した芝居に出ている。また同劇団は、ニューイングランド産婦人科病院で行なわれた公開劇に、少なくとも1865年3月と1868年2月25日から28日、1879年1月の3度出演している。2度目の時、オルコットは三日三晩で計9回もジャーリー夫人役を演じたため、声が枯れてしまったようだ (Alcott, *Journals* 138, 165, 213)。さらに3度目の芝居終了後、同じくジャーリー夫人に扮した彼女は、「こんなおふざけに興じるのは年を取りすぎた。心は沈み、すっかり消耗している身には芝居はきつすぎる。」(213)と、持ち前のサービス精神を発揮し、精魂尽き果てるまで観客を沸かせたことを日記で明らかにしてもいる。

ディケンズ作品のアレンジ劇についてはボランティア精神を発揮したオルコットだが、自身の執筆活動においては、スター作家を夢見てディケンズ作品を利用した印象が強い。その示唆を、すなわちディケンズファンを意識する利点を彼女にほのめかしたのが、小説家で演説家でもあるジョージ・ウィリアム・カーティス (George William Curtis, 1824-92) であった。1856年1月に行われた彼の講演「現代のイギリス小説 (Contemporaneous English Fiction)」を聴いた彼女は、帰宅直後から興奮冷めやらぬまま、『骨董屋』をアレンジした詩「リトル・ネル」 (“Little Nell”) を作り、1856年3月15日付の日刊紙『ボストン・クーリア』 (*Boston Courier*) への掲載を果たした。また、ここぞとばかりにオルコットは『ドンビー父子』 (*Domby and Son*, 1846-48) をもじった詩「リ

トル・ポール」(“Little Paul”)も書き、翌月19日付の週刊紙『サタディ・イーヴニング・ガゼット』(*Saturday Evening Gazette*)に発表している。

さらにオルコットが家庭新聞『ピクウィック・ポートフォリオ』(*The Pickwick Portfolio*)—ディケンズ作『ピクウィック・クラブ』(*The Pickwick Papers*, 1836–37)のオルコット家版—を再編集し『若草物語』に転載したことも好例である。この家庭新聞は、1850年代のはじめ、「ピクウィック・クラブ (the Pickwick Club)」の登場人物になり切ったオルコット家四姉妹が共同編集したものである。長女アナ(Anna)が編集者サミュエル・ピクウィック(Samuel Pickwick)を、のちに作家デビューする次女イザが新聞記者オーガスタス・スノドグラス(Augustus Snodgrass)、三女エリザベス(Elizabeth)がトレシー・タップマン(Tracy Tupman)、四女メイ(May)がナサニエル・ウインクル(Nathaniel Winkle)を演じた。原作では、通信部を組織した4人が、旅先の見聞や珍事件を旅行記にまとめクラブ会員に報告するのだが、オルコット姉妹も各自、詩、ロマンス、ファンタジー、自伝的作品、なぞかけ、告示などの原稿をクラブの集会日に持ち寄り、新聞形式にまとめ、朗読報告した(Shealy 15)。オルコットは自伝的小説『若草物語』で、同様の役柄を割り振ったマーチ家4姉妹に週刊紙「ピクウィック雑報」(*The Pickwick Portfolio*)を発行させている。「かつてほんとうに生きていた少女たちの手で作られた本当の新聞の写しであることを保証する」(Alcott, *Little Women* 89, 強調原文)という作中の但し書きは、オルコット4姉妹がディケンズ作品をアレンジしていた伝記的事実を露骨にほめかすものである。とすれば、この場面は、ディケンズのキャラクターになり切っていたオルコット姉妹の行為や当時の創作物が『若草物語』上

で主題化されている点において、ディケンズ作品と習作期のオルコット作品が絡み合う場面と言えよう。

ディケンズファンとしての体験を作品に生かす試みはさらに続く。たとえば、南北戦争の従軍看護師に志願したオルコットは、『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*, 1843–44)に出てくる悪徳看護師セアラ・ギャンプ(Sarah Gamp)の登場場面を、本人になりきって傷病兵に読み聞かせた(Cheever, *Louisa* 155)⁶⁾。原作によると、ヤニ汚れのひどい古びた黒のガウン、ショール、ボンネットに身を包むギャンプ夫人は(Dickens, *Martin* 269)、「白衣の天使」フローレンス・ナイチンゲール(Florence Nightingale, 1820–1910)とは似ても似つかぬ存在である。双方の両極端な看護師像を自分の身体で合体させることで、オルコットは傷病兵の笑いを誘っていたのかもしれない。その珍体験を彼女は『病院のスケッチ』(*Hospital Sketches*, 1863)に昇華し、大評判を得ている。

さらに、セアラ・ギャンプ好きが高じて、オルコットは自宅を「ギャンプの裏部屋(Gamp's Garret, Cheever, *Louisa* 191; LaPlante 258)と名付け、部屋全体をコーディネートしたこともある。またそのキャラクターに会いたくなった彼女は、ヨーロッパ旅行中、セアラ・ギャンプ探しをしている。ガイド役を依頼されたイギリス在住の「アメリカ研究の父」モーゼス・コイト・テイラー(Moses Coit Tyler, 1835–1900)は、架空の人物であるはずのギャンプ夫人を探し回るオルコットのオタクぶりに驚きの色を隠せなかったようだ(Tyler 15–16)。後日、オルコットはこの「ディケンズ巡礼(a Dickens pilgrimage)」(Alcott, “A Dickens Day” 1)を題材に、1867年12月26日付の週刊紙『インディペンデント』(*The Independent*)に短編旅行記「ディケンズの日」を寄稿している。本作品

は、大学教授の案内のもと、アメリカ人女性がディケンズ作品内の情報と現実世界での聞き込み調査をもとに、ギャンプ宅を探し当てるといふ話である。結果、老齢のそれらしい看護師はいたものの、その名はギャンプでなかったというオチがつく(217)。

このようにアマチュア作家からプロ作家に転向する際、オルコットはディケンズファンにウケる作品作りを意識していた。大衆迎合的な作品を良しとしないロマン派男性作家の葛藤をよそに、彼女はパン代とバター代を稼げる作家になろうとしたのだ。教育哲学者で夢追い人である父親の代わりに、筆一本で一家6人の生活費を稼がなければならなかったオルコットの重責にかんがみると、彼女の潔い割り切り方も理解できるかもしれない。

おわりにかえて—セレブ作家となったオルコット

同時代の感傷小説・家庭小説ブームに乗った『若草物語』で、オルコットは予想外の商業的成功を手に入れ、一躍セレブ作家に仲間入りした。名門女子大のヴァッサー大学(Vassar College)での講演会や(Alcott, *Journals* 196)、シラキュースでの女性会議など、行く先々で彼女は有名人扱いを受ける。「ポンプの柄のように[オルコットの]手を振り」(197)、サインとキスを求めるファンたちから、このセレブ作家はいつも「命からがら」逃げまくる(Alcott, *Letters* 198)。しかし追っかけファンたちは、出先だけでなく、自宅にまで押し寄せ、作家のプライバシーをとことん侵害してくる。オルコットは次第に、好奇心旺盛な見物客や塀の上に座ってメモを取る記者、庭の果物をもぎながら作家をスケッチする画家などの見世物になる。彼女はファン対応に明け暮れるあまり、本格長編小説を執筆する精神的・時間的余裕を奪われる。執筆時間を確保する権利が作家にはあるは

ずだと、オルコットはやり場の無い憤懣を日記にぶつける(Alcott, *Journals* 183)。また、自伝的小説『若草物語』の続編でオルコットは、同じくセレブ作家となった登場人物に、「不運な作家を保護すること(中略)のほうが国際著作権よりも致命的な問題だ」(Alcott, *Jo's Boys* 39)と苛立たしい感情を吐露させてもいる。彼女たちは名声の代わりに自由を失ったのだ。

では、「命からがら」ファンから逃げ回るオルコットは、利益追求型の執筆方針に後悔していたのか。結論から言えば、『若草物語』がパン代とバター代を稼ぎ出しただけでなく、長年の借金苦から彼女を解放させてくれたことに、オルコットは安堵していた。それゆえ彼女は、ファンやパパラッチからの責め苦を名声ゆえの代償だと割り切ろうとする。というよりこのセレブ作家は、“It looks like impertinent curiosity to me; but it is called ‘fame,’ and considered a blessing to be grateful for, I find.”(Alcott, *Journals* 183)と、その自己犠牲こそが名声なのであり、むしろそれをありがたく思うべきではないかと理性的に解釈しようとしている。

ただし“Anything to suit customers.”(164)と大衆迎合路線を公言するオルコットでも、メルヴィルやホーソンと同様、大衆小説家に甘んじることを端から受け入れていたわけではない。事実、彼女の出世作『若草物語』は、本格長編小説の執筆を希望する彼女にとって、妥協の産物であった。この「単調な作品(the “dull book”）」(166)は、お涙頂戴ものの感傷小説や家事アドバイス満載の家庭小説など、同時代の流行に沿う少女小説を執筆するよう、ある編集者から依頼された彼女が、気乗りしないまま書き上げたものだったからだ。作家の予想を外れ、金の卵となった本作品はたちまち、児童文学者オルコットという作家像を形成する。以降、彼女は、“Children’s Friend”(Hochman 23-24)という表向きの顔を維持するため、児童向け物

語—「金儲け主義の本 (a catchpenny book)」(Alcott, *Journals* 200)—を書き続けるジレンマを抱えることになる⁷⁾。

以上のように、商業主義的な売れっ子作家と、芸術至上主義的な売れない作家に二分されていた19世紀中葉の文学者たちは、芸術活動と日常生活との間で日々葛藤していたのである。

本研究は JSPS 科研費26770112の助成を受けたものです。

注

- 1) ウォルト・ホイットマンアーカイブ (The Walt Whitman Archive) には『草の葉』初版の画像データが全編掲載されている。
- 2) ディケンズは、コピーライターとして文筆を開始し、自身の編集する月刊誌のための広告を選んだり自ら書いたりして広告産業と結託し、晩年は自作品の朗読会で自ら広告塔となって作品を売り込むことに心血を注いだ (Wicke 25-26)。広告塔としての彼のキャリアは、まさに19世紀中葉アメリカの、商業主義や広告に沸く時代性にも適合していたと言えよう。
- 3) Lawrence H. Officer and Samuel H. Williamson. "Computing 'Real Value' over Time with a Conversion between U.K. Pounds and U.S. Dollars, 1774 to Present." *MeasuringWorth.com*. で換算。
- 4) 1850年、エマソンから贈られたゲーテ著『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(*Wilhelm Meister's Apprenticeship*) をもとに、オルコットは著書『現代のメフィストフェレス』(*A Modern Mephistopheles*, 1877) を執筆している (Alcott, *Journals* 60)。この翻案は、オルコットにとってゲーテの影響力が強かったことを示すものであろう。
- 5) ゲーテと少女ベッティナー・フォン・アルニム (Bettina von Arnim, 1785-1859) との往復書簡『ゲーテのある子どもとの往復書簡集』(*Goethe's Correspondence with a Child*) は、1835年にドイツで、1841年にアメリカで出版されたものである。
- 6) 従軍看護師時代のオルコットとディケンズ『マーティン・チャズルウィット』との関連性については、拙稿「無名戦士に愛と敬意を—オルコット『病院のスケッチ』における原ヨーロッパ体験としての看護」を参照。
- 7) 市場受けを狙うと「つまらない道徳話 (moral pap)」(Alcott, *Journals* 204) しか書けない現実に、オルコットが心底嫌気を差していた点については、拙稿「"Moral Pap for the Young" - Alcott の <Little Women 三部作>における家事と教育」を参照。

引用文献

- Alcott, Louisa May. "A Dickens Day." *The Independent* 26 Dec. 1867: 1.
- . "Charles Dickens: How He Looks and How He Reads." *Sacramento Daily Union* 26 September 1867: 3.
- . *The Journals of Louisa May Alcott*. Ed. Joel Myerson and Daniel Shealy. Athens: U of Georgia P, 1997. (ジョーエル・マイヤースン、ダニエル・シーラー編『ルイーザ・メイ・オルコットの日記—もうひとつの若草物語』宮木陽子訳、東京、西村書店、2008年)
- . *Jo's Boys, and How They Turned Out*. 1886. New York: Little, 1953. (L・M・オルコット『第四若草物語』1963年、吉田勝江訳、東京、角川書店、2008年)
- . *Little Women, or, Meg, Jo, Beth, and Amy*. 1868. Ed. Anne K. Phillips and Gregory Eiselein. New York: Norton, 2004. (L・M・オルコット『若草物語』1986年、吉田勝江訳、東京、角川書店、2008年)
- . *The Selected Letters of Louisa May Alcott*. Ed. Joel Myerson and Daniel Shealy. Athens: U of Georgia P, 1995.
- Baym, Nina. "Again and Again, the Scribbling Woman." *Hawthorne and Women: Engendering and Expanding the Hawthorne Tradition*. Ed. John L. Idol and Milinda M. Ponder. Amherst: U of Massachusetts P, 1999. 20-33.
- Blake, David Haven. *Walt Whitman and the Culture of American Celebrity*. New Haven: Yale UP, 2008.
- . "When Readers Become Fans: Nineteenth-Century American Poetry As a Fan Activity." *American Studies* 52 (2012): 99-122.
- Cheever, Susan. *Louisa May Alcott: A Personal Biography*. New York: Simon and Schuster, 2010.
- Dickens, Charles. *Martin Chuzzlewit*. 1843-44. New York: Oxford UP, 2009.
- . *The Pilgrim Edition of the Letters of Charles Dickens*. Ed. Madeline House, et al. Vol. 3. Oxford: Clarendon P, 1965.
- Eiselein, Gregory, and Anne K. Phillips, eds. *The Louisa May Alcott Encyclopedia*. Westport: Greenwood, 2001. (アイスレイン・グレゴリー、アン・K・フィリップス共編『ルイーザ・メイ・オルコット事典』篠目清美訳、東京、雄松堂書店、2008年)
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol. 3. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1874.
- Garvey, Ellen Gruber. *Writing with Scissors: American Scrapbooks from the Civil War to the Harlem Renaissance*. New York: Oxford UP, 2013.
- Gilmore, Michael T. *American Romanticism and the Marketplace*. 1985. Chicago: U of Chicago P, 1988. (マイケル・T・ギルモア『アメリカのロ

- マン派文学と市場社会』片岡 厚・宮下雅年訳、東京、松柏社、1995年)
- Helms, Whitney. "Performing Authorship in the Celebrity Sphere: Dickens and the Reading Tours." *Papers on Language and Literature* 50 (2014): 115–51.
- James, William, and Henry James. *William and Henry James: Selected Letters*. Ed. Ignas K. Skrupskelis and Elizabeth M. Berkeley. Charlottesville: UP of Virginia, 1997.
- John, Juliet. *Dickens and Mass Culture*. 2010. New York: Oxford UP, 2013.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford UP, 1941. (F・O・マシーセン『アメリカン・ルネサンス—エマソンとホイットマンの時代の芸術と表現』飯野友幸・江田孝臣・大塚寿郎・高尾直知・堀内正規訳、東京、上智大学出版、2011年)
- McGill, Meredith L. *American Literature and the Culture of Reprinting, 1834–1854*. 2003. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2007.
- McParland, Robert. *Charles Dickens's American Audience*. 2010. Lanham: Lexington, 2012.
- Melville, Herman. *Correspondence*. Ed. Lynn Horth. The Writings of Herman Melville 14. Everston and Chicago: Northwestern UP and the Newberry Library, 1993.
- Moran, Joe. *Star Authors: Literary Celebrity in America*. London: Pluto, 2000.
- Officer, Lawrence H., and Samuel H. Williamson. "Computing 'Real Value' over Time with a Conversion between U.K. Pounds and U.S. Dollars, 1774 to Present." *MeasuringWorth.com*. 5 Nov. 2014 <<http://www.measuringworth.com/>>.
- Rose, Anne C. *Voices of the Marketplace: American Thought and Culture, 1830–1860*. 1995. New York: Rowman and Littlefield, 2004.
- Shealy, Daniel, ed. "Louisa May Alcott's Juvenilia: Blueprints for the Future." *Children's Literature Association Quarterly* 17 (1992): 15–18.
- Stern, Madeleine B. "Louisa Alcott, Trouper: Experiences in Theatricals, 1848–1880." *The New England Quarterly* 16 (1943): 175–97.
- Susina, Jan. "Men and *Little Women*: Notes of a Resisting (Male) Reader." *Little Women and the Feminist Imagination: Criticism, Controversy, Personal Essays*. Ed. Janice M. Alberghene and Beverly Lyon Clark. New York: Garland, 1999. 161–72.
- Tomalin, Claire. *Charles Dickens: A Life*. 2011. New York: Penguin, 2012. (クレア・トマリン『チャールズ・ディケンズ伝』高儀 進訳、東京、白水社、2014年)
- Trollope, Anthony. *The Warden*. 1855. New York: Oxford UP, 2008.
- Tyler, Moses Coit. "A Letter about Louisa May Alcott in London." 1866. *Alcott in Her Own Time: A Biographical Chronicle of Her Life, Drawn from Recollections, Interviews, and Memoirs by Family, Friends, and Associates*. Ed. Daniel Shealy. Iowa: U of Iowa P, 2005. 15–16.
- Whitman, Walt. "U.S. Editions of *Leaves of Grass: Leaves of Grass, 1855*." Oct. 2014. *The Walt Whitman Archive*. Ed. Folsom Price and Kenneth M. Price. 25 Nov. 2014 <<http://www.whitmanarchive.org>>.
- Wicke, Jennifer A. *Advertising Fictions: Literature, Advertisement, and Social Reading*. New York: Columbia UP, 1988. (ジェニファー・A・ウィッキー『広告する小説』富島美子訳、国書刊行会、1996年)
- Zboray, Ronald J. "Antebellum Reading and the Ironies of Technological Innovation." *Reading in America: Literature and Social History*. Ed. Cathy N. Davidson. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1989. 180–200.
- 梅宮創造「序にかえて—ディケンズと公開朗読」、チャールズ・ディケンズ『ディケンズ公開朗読台本』梅宮創造訳、東京、英光社、2010年、1–26頁。
- 川澄英男『ディケンズとアメリカ—19世紀アメリカ事情』東京、彩流社、1998年。
- 本岡亜沙子「"Moral Pap for the Young"—Alcottの< Little Women 三部作>における家事と教育」、『ヘンリー・ソロー研究論集』第38号、2012年、1–10頁。
- 「無名戦士に愛と敬意を—オルコット『病院のスケッチ』における原ヨーロッパ体験としての看護』、倉橋洋子・辻 祥子・城戸光世編『越境する女—19世紀アメリカ女性作家たちの挑戦』東京、開文社出版、2014年、93–112頁。
- 山口ヨシ子『タイムノヴェルのアメリカ—大衆小説の文化史』東京、彩流社、2013年。